



2020年7月6日放送

## 「第70回日本皮膚科学会中部支部学術大会 ①

大会を終えて」

金沢医科大学 皮膚科  
教授 望月 隆

### 学会テーマ 皮膚科の学びを楽しもう

去る2019年10月5日、6日の両日、第70回日本皮膚科学会中部支部学術大会を、金沢市のホテル日航金沢を主会場として開催させていただきました。ちょうど巨大な台風が連続して到来した、その間を縫うような時期でしたが、天候にも比較的恵まれ、予定通り終了することができました。1,400人に迫る多数の方々にご参加いただきましたことを、改めて御礼申し上げます。

学会のテーマは「皮膚科の学びを楽しもう」としました。日進月歩の専門領域の知識を深める喜び、日常診療の中の学びの面白さ、そして興味の赴くまま皮膚をめぐり不思議に触れる楽しみなど、参加者それぞれの学びを深め、楽しんでいただこうと考えました。また昨今の医学教育の変革の中、皮膚科医を、そして医学生をどう育てていくか、さらにヒトはどのように学んでいくのか、を考えることもこのテーマに含まれると考えた次第です。

会長講演では、金沢医科大学の3年生の講義週間に実施している能動的学習 active learning の一形態、Team Based Learning (TBL) を紹介しました。こ

### 皮膚科でのTeam Based Learning (TBL)の取り組み

Active Learning (AL 能動的学習)の時代

一方向的な講義形式の教育

↓  
学習者の能動的な参加を取り入れた学習法  
「主体的・対話的で深い学び」

皮膚科ユニット(3年)で診断演習にAL(TBL)を入れられないか

総論(診断学)の講義が終わった後にグループで課題学習

H25年から徐々に改良し、標準的なTBLの形態に近づいた  
(○事前テスト、○ピア評価、○演習後講義、△事後テスト、×複数回)

れは100人余りの学年を、8~10人ずつ、12程度の班にわけ、その班ごとに異なる課題を与えて、これを皆で解決してもらい、それを全体討議の場で発表してもらおう、というものです。一方向的な講義形式の教育に加えて、学生の能動的な参加を取り入れた学習法で、「主体的・対話的で深い学び」につながることを期待される方法です。実際に行ったのちに、どのように学んでいたかのアンケートを行ったところ、課題解決の知識のソースとして班のメンバーを挙げた学生が約8割で最も多く(83/105, 79.0%)、教科書、ノートがこれに続き、教員の占める割合はこれより低くなっていました。(教員の不甲斐なさもあるかもしれませんが、)学生がいろんなソースを駆使して疾患について調べ、教えあうことが活発に行われていました。また、1/3の学生は手持ちのタブレットからネット情報にアクセスして知識を得ていたことがわかりました。学部教育では講義時間の削減も予想されますので、一般的な皮膚科の知識は、教材をネット上などで提示して自宅などで予習させておき、教室では小テストを行ったのち、こうした演習を繰り返すことで、実際に使える知識を増やしていくことが可能と考えています。

### 特別講演、招請講演

特別講演、招請講演は学会のテーマ「皮膚科の学びを楽しもう」に即して、教育に理解の深い演者にご登壇いただきました。

特別講演では多くの研究者を育ててこられた高島 明先生に研究の楽しさについてお話いただきました。30年にわたるアメリカでの研究のご経験、また多くの日本からの研究者の指導を通じて、研究テーマの見つけ方、研究戦略、そして論文執筆・投稿の実際まで、研究・発表の楽しさを力強く、また熱く語っていただきました。

もう一つの特別講演は医学教育界のオピニオンリーダー、北村 聖先生に医学教育と能動的学習、専門医教育と医師のプロフェッショナリズム教育についてお話いただきました。動向としてコミュニケーション能力の重視、少人数教育、臨床実習の充実、知識を獲得していく能力の重視を強調されました。私自身、特に学生実習への丁寧な対応は、明日からでも始められる医師育成への貢献であることに思い至り、大きな感銘を受けました。

### 演習 (TBL形式)の課題

課題 6 76歳男性。頭頂部をドアノブで打った既往がある。4カ月前は紫斑であったが同部が盛り上がり、出血も見られるようになったという。

所見をのべよ。

検査項目は？

予想される診断は？



### 本学会の見どころ、聞きどころ-1

A会場 第1日目

特別講演1

高島 明 先生(元Toledo大学)

Joy of studying skin biology abroad

招請講演1

杉田 隆 先生(明治薬科大学)

皮膚マイクロバイオーーム:いかにしてマイクロバイオーームと良い 関係を構築するか

シンポジウム1

「学びを楽しむ」

シンポジウム2

「膠原病診療up-to-date」



### 本学会の見どころ、聞きどころ-2

A会場 第2日目

特別講演2

北村 聖 先生(地域振興協会シニアアドバイザー)

成人の学びを考える

招請講演2

中沢 実 先生(金沢工業大学)

近年の人工知能の動向と未来への展望について

シンポジウム3

「真菌症のup-to-date」

Active Learning「見て当てる皮膚真菌症の原因菌クイズ」と連動(ポスター会場、後援:日本医真菌学会)

様々な学びを楽しんでいただければ幸いです

招請講演では皮膚のマイクロバイオーーム研究で皮膚科とも多くの共同研究を進めておられる明治薬科大学の杉田 隆先生、そしてAI を活用した医工連携を進めておられる金沢工業大学の中沢 実先生にお話しいただきました。杉田先生には皮膚の環境が変化すると細菌・真菌よりなる皮膚マイクロバイオーームは動的に変化し、一方これら微生物間の関係により既存の皮膚疾患が影響を受けること、どうマイクロバイオーームを味方につけて疾患をコントロールするかというプレバイオティクスの原理についての解説がありました。中沢先生は中学校でのAI の活用を例に、利用者にとって門戸がすぐそこに開かれていること、AI の特性を知って、何をさせるか良い課題を与えることが大切であること、そして、それには現場の経験知、暗黙知が重要であることを述べられました。ともに知的好奇心が大いに刺激される内容でした。

### 特別企画 真菌供覧コーナー

今回は特別企画として皮膚真菌症の供覧コーナー「みて当てる皮膚真菌症の原因菌」を開設しました。後援は日本医真菌学会にお願いしました。この企画はポスターで典型的な皮膚真菌症とその病原菌を示し、その前の机に用意した培養標本と顕微鏡標本を実際に観察していただき、理解を深めてもらおうという企画でした。ポスターは生えてきた菌のコロニーの形状から、菌種同定に至る道筋を、白い菌、黒い菌、黒い色がつくかもしれない菌にわけて、白い菌では *Trichophyton rubrum*, *Trichophyton interdigitale*, *Microsporum canis* など、黒い菌では *Exophiala jeanselmei*, *Fonsecaea monophora*、色がつくかもしれない菌では *Sporothrix* 属、*Scedosporium* 属について示しました。このコーナーにはクイズコーナーを併設しました。これは臨床像、顕微鏡所見から原因真菌を考えていくもので、最後のシンポジウム「真菌症 up-to-date」の中で解説し、クイズの成績優秀者は直後の閉会式で表彰することとしました。最終的には実に 40 余名の方にご回答いただき、10 問中 9 問以上正解の先生方を優秀者として表彰させていただきました。ホテルの会場に病原菌の標本を持ち込むに当たって形状を維持したままどのように殺菌するか、



質の良い顕微鏡標本を用意できるかなど教室員も随分苦勞していましたが、10席の顕微鏡席は常に参加者の姿がありました。教室をあげて企画したこのコーナーが多くの方の関心を引いたことを、大変嬉しく思いました。なおこのコーナーの内容は多くの方に見ていただけるよう、当教室のホームページに掲載する予定です。

### **シンポジウム・教育講演**

シンポジウム・教育講演のテーマは若手皮膚科医の皆様の学びに通じるよう、かつテーマに大きな偏りが出ないよう、日頃からつきあいの深い金沢大学、富山大学、福井大学の先生方にご協力をお願いし、セッションの方向や演者を決めていただきました。一つの医局では到底考えつかなかった良い企画になったのではないかと考えています。シンポジウムは「学びを楽しむ」「膠原病診療 up-to-date」「真菌症 up-to-date」の3つ、教育講演は6講演を開催することができました。特に教育講演では多くの中堅の先生方に演者として登壇いただき、若手皮膚科医の気持ちを盛り上げていただいたように思います。シンポジウムの内容を少し解説しますと、「学びを楽しむ」では本学の解剖学の八田稔久教授に生物組織の透明化技術と、それによる立体構築の解明や深部の GFP 発現細胞の観察例などを示していただきました。また「真菌症 up-to-date」では2019年秋に改定された皮膚真菌症診療ガイドラインの概略について、実際に策定にあられた東京医大の原田和俊先生に、「委員会で学んだこと」の演題で解説していただきました。専門家が学びを深めていく経緯が示され、参加者を触発するものがあつたのではないかと考えています。

### **おわりに**

学会では、その地方の風情、味覚など非日常を経験することも大きな楽しみでしょう。学術プログラムの他に石川県を多角的に楽しんでいただく要素も企画に入れました。お菓子や日本酒など「皮膚科の学び」のほかに、石川の風情もお楽しみいただけたでしょうか。最後に北陸地方会の先生方をはじめ、日本皮膚科学会の総会・学術大会チームなど、多くの皆様方のお力添えがあつての開催であつたと、あらためて感謝申し上げます。